

幼児教育から小学校教育への移行における支援のあり方

—遊びの要素を取り入れた活動に焦点をあてて—

M12EP008

杉山 ひとみ

1. 問題

平成20年3月、幼稚園教育要領・小学校指導要領が同時に告示され、それぞれに幼児期の教育と小学校の教育の円滑な接続のため相互に連携することが示された。

幼児教育と小学校教育をつなぐことの重要性から、仙台市（仙台市教育委員会，2010）やお茶の水女子大学附属幼稚園・小学校（お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター，2008）では、先行的に幼児教育と小学校教育の接続について研究を行い、独自のカリキュラムを実践している。このように、幼児教育と小学校教育をつなぐ先行事例は少なくない。しかしながら、自治体や附属学校ならではの体制や取り組み、受け入れる小学校のカリキュラムの違い、地域差など、実践者が先行事例をそのまま取り入れることには難しさがある。また、移行期の支援のあり方は、目の前の子どもや学校、地域の状況に合わせたものであることで効果が高まると考えられる。

そこで、小学校現場において、幼児教育の何をどのように小学校教育へ接続していくか、具体的な姿を探索的に検討していくために、昨年度、幼稚園実習と小学校実習を行い、幼稚園と小学校の違いについて比較検討をした。その上で幼児教育から小学校教育への移行における支援のあり方を検討してきた。幼児教育と小学校教育との大きな段差となっているものは遊びから学習への移行であると考え、今年度は遊びの要素を取り入れた活動を中心に実践し、支援の有効性を検証していくこととした。

幼児の遊びについて、山名（2011）は、そ

こから学ぶことは、インフォーマルな知識ではあるけれど、それがそれ以降の発達において意味があることだとしている。また、生活科におけるスタートカリキュラムを重要視する木村（2003）は、積極的に「遊び」を取り入れることこそ学校教育の急務であると思おうとしている。幼児教育と小学校教育をつなぐものとして、遊びの要素を取り入れた活動の実践をもとに、考察する。

本研究においては、到達目標を定めずに行う活動を「遊び」と捉え、到達目標を定めた中で行う活動を「学習」と捉えることとする。

2. 研究の目的

幼児教育から小学校教育への移行期にある子どもを対象に、小学校における支援のあり方の検討および検証を行う。その上で、小学校において、このような支援を行うにあたっての課題について検討する。

3. 研究の方法

対象校：山梨県内公立A小学校。全校児童数300名弱、各学年2クラスの中規模校である。校舎が特徴的でドアや壁がないオープンな造りとなっている。

対象児童：第1学年2組（男子12名・女子14名）

対象期間：2013年4月～12月

手続き：学級担任として、児童へ関わりながら、ビデオ録画を含め観察を行った。ビデオ録画は、入学式翌日から5月末頃まで、児童登校時から下校時までの間、定点録画を行った。録画にあたり、事前に学校及び保護者の許可を得た上で行った。

4. 昨年度の研究で明らかになったこと

小学校の観察から、移行期の困り感には小学校生活に適応していく過程において、時期ごとに子どもの困り感には違いがあることがわかった。そのことから、移行期を考える際に、子どもの発達課題や入学前の経験値などを考慮していくことや、各小学校独自の教育課程の中で子どもにとって必要としている支援の時期を勘案していく必要があることがわかった。そこで、移行期を困り感の違いから、表1のように、移行期の段階を3期に分けて捉えた。

また、本研究において児童が直面する困難な状態を「困り感」と捉えることとし、小学校で学習や生活等、学校生活全般において、一人では難しいが他者が手を貸すことで解決できる程度の困難さとする。

表1. 移行期の段階一覧（杉山，2013）

段階	期間の目安	困り感の特徴
第1期	入学直後～ ゴールデンウィーク	学校生活へ適応していく上での困り感
第2期	ゴールデンウィーク～ 1学期終了	学習へ適応していく上での困り感
第3期	夏休み明け～ 運動会	集団行動に適応していく上での困り感

5. 研究の結果と考察

幼児教育と小学校教育の違いの中で、最も大きく影響を与えているものが、活動内容の違いである。「遊び」から「学習」への移行である。そこで、遊びの要素を取り入れた活動を取り入れていくことで、幼児教育と小学校教育の活動内容の段差を低いものとしていけると考えた。また、これまでの遊びや経験と机上での学びをつなげていくことで、楽しいことや好きなことに夢中になりながら、学習に移行できることで、学ぶことへの意欲の高まりも期待できると考えている。

ここでは、「遊び」と「学習」をつなぐものとして行った遊びの要素を取り入れた活動に焦点をあてて、述べる。

(1) 第1期における支援と子どもの様子

移行期第1期を入学直後から、ゴールデンウィークまでの時期と捉え、支援を行った。この時期の支援は、学校生活に適応していく上での困り感を軽減することを目的としている。この時期の子どもは、幼児教育と小学校教育の差を大きく感じる事となる。そこで、支援のあり方としては、幼児教育の要素を取り入れながら、小学校教育や小学校の生活の仕方に無理なく適応していける手立てを考えた。その中でも、学級担任として初めて行った遊びの要素を取り入れて行った支援について、詳しく述べる。

【登校後の遊びの時間と空間をつくる】

第1期の支援の中で、子どもにとって有効であったと考えられるのが、「登校後の遊びの時間と空間をつくること」であった。登校時の慌ただしさからくる疲れや落ち着かなさを取りのぞくため、朝の時間をゆったり持ち、自由に遊べる時間を入れた。また、教室以外に安心できる空間が持てるように、子どもが自由に遊べる空間を作った。そこでは、幼児教育で子どもがよく親しんできた遊びができるように環境を整えた。具体的な内容としては、以下の通りである。

時間:登校後から朝の会まで(10~30分程度)

期間:入学翌日からゴールデンウィークまで

場所:遊びの部屋（1組と2組の間にあるオープンスペース）

内容:折り紙、あやとり、工作、おえかき、積木、絵本



図1 遊びの部屋の様子

登校後、朝の支度を終わらせると、多くの子どもが遊びの部屋で過ごしていた。朝の支度が終わると元気に「いってきます。」と遊びの部屋に走っていく子ども、控えめに「遊びにいってもいい？」と聞きに来てから嬉しそうに出かけていく子ども、多くの子どもが遊びの部屋へ行くことを楽しみにしている様子が見られた。登校後、朝の支度が終わった教室には、ほとんど子どもがはず、遊びの部屋は1年生で溢れていた。また、登校後、教室に子どもがとどまる時間が短かったことから、子どもがこの時間を楽しみにしていたことがうかがえた。

その一方で、次のようなエピソードも見られた。

【エピソード①：A児の登校後の様子】

2013.4.9（入学4日目）

手早く朝の支度を終え、遊びの部屋へ来る。約30分、いくつかのコーナーを遠巻きに覗き込みながら歩き、どこのコーナーにも座らない。誰とも言葉を交わさない。

2013.4.11（入学6日目）

あやとりコーナーにいたが、にぎやかなおりがみコーナーへいく。座って飛行機をおる。隣の子に体を向けてやっていることを見ているが話さない。同じ地区の子が来ると顔を向けて見ている。工作をしていた子と体がふれ、少し言葉を交わす。

2013.4.15（入学8日目）

ゆっくり朝の支度をする。遊びの部屋には行かず、教室で担任のあとに距離を置きながら歩いて歩く。時間を気にして担任に話しかけるが、その他は誰とも話さない。

2013.4.17（入学10日目）

おえかきコーナーにいた同じ地区にすむB児が、A児に気付き、「A君！」と呼び、声を掛けに行く。おえかきコーナーには、同じ地区の子が集まっている。B児と話すA児に笑顔が見られる。B児以外の子とも笑いながら話をする。B児がA児の肩に手を回し、じゃれあう。A児の動きが大きくなり、人との距離が近くなる。

【エピソード①】は、同じ幼稚園から就学した子がいなかったA児の入学後の遊びの部屋での様子である。入学直後、友達のいなかったA児が、遊びの部屋で自分が仲間に入っていけそうな場所を探す姿が見られた。その

後、一緒に下校する友達を中心に友達関係ができてきたA児が遊びの部屋で見せる姿には、大きな変化があった。A児にとって遊びの部屋は、好きなことに夢中になれる時間や空間である以上に、仲間探し・仲間作りの場となっていた。

これまで、入学間もない1年生には、学校に慣れていないことから、登校後朝の支度が終わった後、自分の席で静かに過ごすよう求める傾向が多かった。そのため、友達関係も席が近い子ども同士で広がるが多かった。しかし、遊びの時間を取り入れたことで、自由に友達と関わる時間が増え、遊びを通して友達関係に幅も広がりを見せた。自由な時間と空間を保障することで、子どもは自分たちの力でこれまでの以上に短い時間で友達関係を築いていた。これまで学校生活に慣れていないことへの配慮として、登校後自分の席で過ごすことを求めているが、子どもにとっては時間も空間も友達関係も多くの制限の中にあつたことに気付いた。これは、支援を検討してきた中では、見えていなかったことであり、これまでの支援を見直す視点が得られた。

（2）第1期における第2期の素地づくりの内容と子どもの様子

多くの幼稚園・保育園から入学してくる子どもでは、幼児教育での遊びや生活経験にも多くの差があり、同じ土台に立っているとは言い難い。土台が違いうえでは理解し合えないことも多くあるため、小学校で生活をともにする中で、全員で同じ遊びや生活経験を重ねていくことで、土台を揃え、その上で学習とのつながりを持たせていくことが必要であると考へた。そこで、第1期の中で、第2期の学習につながる素地づくりとして、全員で行う遊びや生活経験の中に、“学習につながる要素（数や形の感覚、ことば遊びなど）を活動の中に取り入れる”ことを行った。全員

で行う遊びの中に、学習と遊びをつなぐものとして、パターブロックや積み木を取り入れた。また、学校探検の中に、ひらがな探しや数字探しなどを取り入れた。具体的な事例をいくつか挙げる。

【学習につながる要素を活動の中に取り入れる】

①「学校にきて何日目」

朝の会で毎日「学校に来て何日目」を発表し合う。数字をかいた紙は、白板上部に張っていく。その数字を端から数える、1 ことばしで数える、逆から数えてみるなど、いくつかの数え方を行った。

②ひらがな探検

一文字だけ書かれたひらがなカードを持って学校探検にでかける。カードと同じ文字を見つけてく



図2 ひらがな探検の様子

③パターブロックや積み木

パターブロックや積み木を使って、思い思いのものを作ったり、「学校」というテーマを表現したりする。



図3 パターブロックの作品

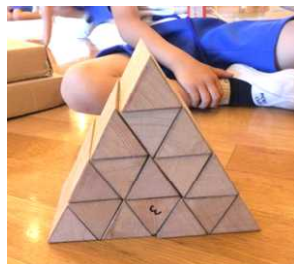


図4 積み木の作品

④仲間あつめゲーム

言葉に含まれる音の数だけ集まる。拍手の数だけ集まる。出身園ごとに集まる。など、様々なパターンで繰り返し行った。

(3) 第2期における支援と子どもの様子

移行期第2期を、ゴールデンウィーク明けから1学期終了までと捉え、支援を行った。この時期の支援は、学習へ適応していく上での困り感を軽減することを目的としている。幼児教育で個々の遊びを中心に活動してきた子どもは、一斉に同じ行動をすることや机上での学習を求められてきていない。また、遊びの中での気付きや学びを意識化や言語化する経験もほとんどない。このことから、この時期は、遊びの中での無自覚な学びを積み重ねてきた子どもが、自覚的な学びへと移行していく過程だと捉えられる。そこで、“遊びや生活経験からの学びを机上の学習へと結び付ける”ことを行い、学習に無理なく適応していける手立てを考えた。特に第1期における素地づくりで行った、全員で行った遊びや生活経験を机上の学習へ結び付けていくことを中心に行った。その中でも、素地づくりでの遊びや経験が活かした授業を中心に述べる。

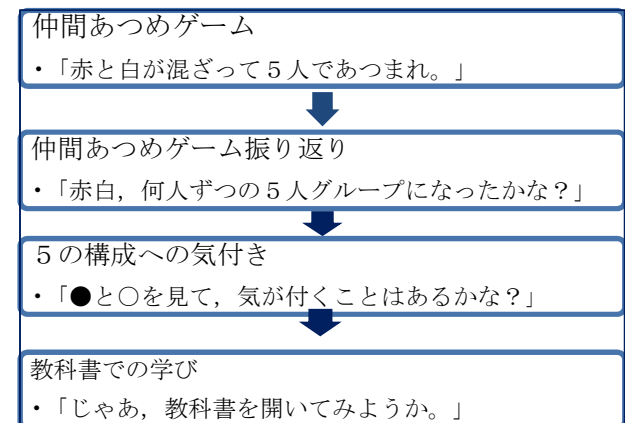
以下で挙げるエピソード②は、遊びの要素を取り入れた活動から学習に結び付けていった点と、素地づくりでの活動を想起させるつぶやきが子どもから聞こえてきたという点で、この時期の特徴的な姿があらわれたものである。

【遊びや生活経験からの学びを机上の学習へと結び付ける】

日時：5月24日（金）

単元：算数「いくつといくつ（5の構成）」

主な授業の流れ：



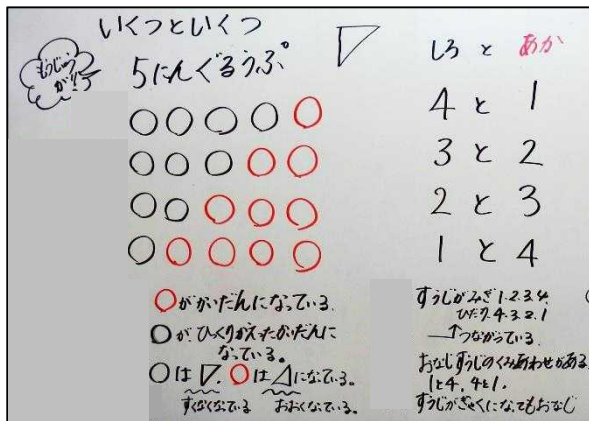


図5 5月24日板書

【エピソード②：2013.5.24 算数の授業の中で】
 赤●，白○で5の数の構成を板書し終わった後
 T：何か見て気が付くことはありますか？
 C1：●がひっくりかえった階段になっている！
 T：いいことに気がついたね。
 他に何か気が付いた人はいるかな？
 C2：●がこうなってて（身振り）△を描く）
 ○がこうなってて（身振り）△を描く）。（i）
 *「あー」という声とともに、姿勢が崩れていた子ども達が起き上がる。（ii）
 T：いいことに気がついたねえ。
 ●が（△を板書しようとする）
 C3：ひっくりかえってる。
 T：（△を板書し終え）●は△でいい？
 ○は（△と板書しようとする）
 C3：○はこう（身振り）△を描く）
 T：（△を板書し終え）○は△でいい？
 すごいねえ、いいことにきがつくねえ。
 みんな、わかった？
 C4：うん。（頷きながら、両手を寄せてくっついて
 いるという仕草をする。）

【エピソード②】は、遊びから机上での学習へ自然な流れでつないでいくことができた授業である。それでも、ただ楽しかった遊びから、白板を使った学習へうつっていくだけでも、姿勢が崩れ、意欲を失っていく子どももいた。そんな中、C2の下線（i）の発言から、下線（ii）のように子どもの授業態度に大きな変化が現れた。▽と△を合わせた形は、(2)②でのパターンブロックや積み木で子どもがよく目にするものでもあった。そのことから、C2の発言がどの子にとっても

理解できる気づきであり、気づきの視点に大きな驚きをもたらされるものであった。

学んでいるということ意識していなかった遊びでの経験が、算数での学びとして子どもに理解されていく過程が見られた。これは、平成22年11月に示された「幼児教育と小学校教育の円滑な接続のあり方（報告）」（幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議，2010）の中で書かれている幼児期の遊びの中から生まれる学びの芽生えが、小学校での自覚的な学びへと移行していく過程であると考えている。

（4）第3期における支援と子どもの様子

移行期第3期を、夏休み明けから運動会までと捉え、支援を行った。この時期の支援は、集団行動に適応していく上での困り感を軽減させることを目的としている。これまでの学級や学年という集団での活動から、全校としての集団、たてわり班としての集団、低学年としての集団など、集団の形態も多様化する。また、その中で求められる行動は、一律で機敏であることが多い。そこで、集団の中での行動の見通しや、状況の把握をやすくするための手立てを考えた。この時期の支援を行ううえで大事にしてきたことは、“**集団の中での行動のイメージや見通しをもたせる**”ことであった。

【集団の中での行動のイメージや見通しをもたせる】

運動会に向けて練習を行う中で、入学して初めての運動会を経験する1年生と他学年の差が最もでるものが、ラジオ体操時に行う体操の隊形に開く練習である。全校が体操の隊形に開く基準として、1年生が大役を果たす場面でもある。そこで、次の4つの手立てのもとに、見通しを持てるよう支援した。

①昨年度の運動会やラジオ体操をしている様子をビデオで鑑賞する。

②ラジオ体操の開き方での、1年生の具体的な動き方を、板書等で説明する。

③教室でラジオ体操の開き方の練習を行う。

④校庭で実際に動きながら、ラジオ体操の開き方を確認する。

結果的には、例年に比べ、1年生の動きが的確で全校練習に支障をきたすことはなかった。しかし、この時期の支援には遊びの要素を入れることができなかつた。それは、教師側に遊びの要素を入れる余裕がなかつたことに起因する。運動会練習では、全校で行う練習が多いことや運動会当日には多くの保護者も参観することから、教師は多くの人の目を意識することとなる。多くの人が参観する機会が、教師としての力量を問われる場を感じられることから、必要以上に子どもに機敏で的確な動きを求めようとしてしまう。この教師の意識から抜け出すことができなかつたため、小学校の運動会練習でよく見られるような練習を重ねることでの的確な動きを身に付ける支援内容となった。

この時期の支援を行う際に、遊びの要素を取り入れた活動を行うことができれば、1年生の子どもには、もっと楽しい運動会のイメージが持てていただろう。また、教師にも、遊びの要素を取り入れた活動を行う余裕があれば、子どもに機敏で的確な動きを求めすぎず、子どもの自由な発想を生かした中で新たな運動会のあり方を模索することができたと考えている。

(5) 今年度の実践で見えてきたこと

昨年度、検討してきた支援を中心に、9月まで実践を行ってきた。遊びの要素を取り入れた活動を行うことで、幼児教育の遊びと小学校教育での学習への移行をなだらかなものとするよう支援してきた。遊びの要素を取り入れた活動を行う中で、強く意識してきたことは、“つなぐ”ことであった。遊びと学習をつなぐ。生活経験と学習をつなぐ。教師が意

図的に“つなぐ”ことをしていくことで、つなぐことの経験が新たな土台となり、子ども自身がこれまでの経験や知識を新たな出来事や事象とつなぐことができるようになることを期待していた。具体的には、遊びの延長線上にある学びを子どもが自ら見出していけることや、遊びの中で興味を持ったことを子ども自らが追求していく中で学びに通じていくことを期待していた。

そんな期待する姿に近づくエピソードが、10月以降の子どもに見られるようになってきた。

【エピソード③：2013.10.9 お金の計算】
学年ごと、町のお祭りに出店する準備中の出来事。1年生はりんごジャム(400円)と松ぼっくりツリー(100円)を販売する。お客さんとお金のやり取りをお店やさんごっこをしながら、練習することになった。

T: みんな、お客さんが来た時に、お金の計算ができるかな?
C: う〜ん。
(できるという子とできないという子と半々。)
T: まだ、100円とか大きな数は勉強していないけど、0をとって、100円は1、400円は4って考えれば、みんなにも計算できるよ。
じゃあ、ジャム2個とツリー1個くださいって言われたら?
(ホワイトボードに、ジャムの写真2枚とツリーの写真を1枚貼り、 $400+400+100$ と書く)
C: (少し間があって、2~3人の子どもが) 900円!
T: どうやって、計算したの?
C: 400円は4だから、 $4+4+1$ で $8+1$ だから、9。
(いくつか、問題を出しながら計算の練習をする。)
T: ジャム3つとツリー2こは?
($4+4+4+1+1$ と板書)
C: (これまで以上に考え込んでいる。時間がかかってから) $13?15?$
C1: 14!
T: 式が長くて、計算が難しいけど、どうやって計算したの?
C1: (14と答えた子どもが素早く挙手し、)
 $4+4+4+1+1$ ってやるんじゃないかって、先に $4+1$ をして、 $4+1+4+1+4$ ってやれば、 $4+1$ は5だから、 $5+5+4$ になって、 $10+4$ で14になるの。
C: うお~!! (子ども達からどよめきと感嘆の声とともに、拍手が起こった。)

エピソード③は、お祭りに向けて、販売の練習をしている時のものである。「お客さんが来た時に間違えないでお金をもらえるかなあ。」「お金の計算なんて、できないよ〜。」という子どもの声から、お店屋さんごっこをしながら練習することとなった。一見、算数の授業風景のようであるが、お祭りに出店することへの切実な課題に対して、(3)で行った支援と同様に、遊びの要素を取り入れた中で解決を図ろうとしたものである。

このエピソード③の中で、C1の子どもがこれまでの既習を活かして、 $4+1=5$ 、 $5+5=10$ と計算を簡単にするアイデアを出した時に、子ども達から大きな声で「おめき」と感嘆の声が上がった。C1は、これまでの既習と想起したうえで、目の前の問題とつなげて考えていた。また、既習を活かして問題を解決していることに、他の子どももすぐに気付いていた。子どもにとっては、既習を活かすことで自分たちでも問題が解決できることは大きな驚きであり、新たな力を得たような自信を得ることができた。

これまで算数が苦手なD児が、ノートにこんなことを書いていた。

ほんとうにいいけいさんができて、けいさんがよくわかった。ほんとうにすごいかんたんだから、けいさんってだいじだとおもった。

算数の授業の中で、繰り返し指導してきたが、なかなか伝わらなかったことが、生活と結びつき、ストンと理解できたようだった。机上の学習と生活をつなげた中での理解の深まりは想像以上に大きいものだった。

次のエピソード④は、子どもと校区外にバスで初めて校外学習に出かけた車中での出来事である。

【エピソード④：2013.10.21 校外学習の車中】
校外学習にバスで出かけている車内でのこと。
C1：先生～。あそこの看板に「ろく」って書いてあ

るよ？
T：どれ？あー、ほんとだあ。漢字で六って書いてあるねえ。
C2：先生～。あっちには、子どもの子と大きいって字があるよ。
T：あー、ほんとだあ。子ども服と大人服って書いてあるから、子と大きいがあるね。
(ここから、車窓から見える学習した漢字探しが始まった。)
C3：習った漢字が2つもあったよ！(大雨冠水注意の標識を見ながら)大雨って書いてある。
C4：こっちにもあるよ。(標識を見ながら)大きい月って書いてあるよ。
T：大きい月って書いて「おおつき」って言うんだよ。
C5：あー、インターネットって書いてある。
C6：あー、マンガも書いてあるよ。
T：みんな、すごいね。漢字やカタカナを勉強したから、いろんなものが読めるようになったんだね。
(この後も、子どもは到着するまで読める字を探し続けた。)

バスに乗った時から、「先生、なんでバスには、あんなに鏡がついているの？」「先生、あの車は〇〇って車だよ。」など、子どもが口々に自分たちが気づいたことを話していた。その中で、一人の子どもが車窓から見えた漢字に目をとめたことから、既習の文字探しが始まった。(2)②で行った「ひらがな探し」を想起させる子どもの姿だった。教師の働きかけがなくとも、子どもは自分たちで既習と事象をつないでいた。文字探しに夢中になれる子どもであることは、教師が期待していた姿をそのまま示してくれるものであった。

また、今回、初めて校外に出た子どもの姿を目にする機会となった。バスの中での文字探しは初めて見る光景であったが、子どもは生活の中で、日常的に行っていることかもしれない。教師が子どもを見ているのは、学校での一部に過ぎず、子どもはもっと多くの場面で生活につながり、学習を生かしているかもしれない。学校という一面だけでは見取り切れない子どもの姿の中に目を向けることで、生活と学習をつないでいける接点を見いだしていけるのかもしれないと考えている。

6. 全体考察

成果として、遊びの要素を取り入れた活動の有効性が確かめられたと考えている。実際に入学してきた子どもは、卒園した園のカラーが色濃く残り、幼児教育の内容の差異も大きく出ていた。そこで、全員で遊びや生活経験を共有することで、幼児教育段階の遊びや生活経験の差異をうめる手立てとした。遊びから学習へと移行していく際、遊びの何が学習につながっているのか、どうつながっているのか、子どもたちは同じ土台に立って理解することができた。遊びが学習につながっていると感じられることで、子どもにとって、遊びから学習への段差を低くすることができたと考えている。

また、遊びと学習はそれを仕組んでいく教師側にねらいの大きな違いが存在するが、5(5)に見られたように、子どもにとっては遊びながら学ぶことや学んだことを活かして遊ぶことも多くあり、遊びと学習の区別は大きな問題ではないと感じられた。遊びと学習の要素を織り交ぜながら、子どもの発達や興味関心に合わせた中で、支援を行っていくことが重要であると考えている。

加えて本研究は、公立小学校における移行期の子どもへの支援のあり方の可能性を探るものであった。今回行った実践は、公立小学校においても、無理なく実践できる内容であったと考えている。移行期第1期の内容については、生活科において合科的な内容でスタートカリキュラムとして位置づけることで、教育課程に組み込むことができる。また移行期第2期での取り組みは、これまでの学習内容を大きく変更するものではなく、学習内容へのアプローチの方法を変えているに過ぎない。移行期の子どもへの支援のあり方としては、教師が移行期の子どもの困り感等を念頭に置きながら、幼児教育と小学校教育とつなぐものとして遊びの視点を取り入れるだけで、大きく変わっていくと考えている。

その一方で、小学校教師としての経験や意識から抜け出すことが難しい場面もあった。子どもの困り感があることはわかっている、これまでのやり方を変えられなかったものもいくつかあった。5(4)に見られたように、教師の力量が問われていると感じる場面では、子どもに求めるものが高くなり、無理をさせてしまうことがあった。また、限られた時間の中で教科のねらいに迫ろうとすると「もう少し、がんばれるのではないか。」「全員の子どもの指導をするまでは、授業を続けたい。」という思いから、子どもの困り感に寄り添うことができないこともあった。この点を今後の課題としたい。

【引用文献】

- 木村吉彦. (2003). 生活科の新生を求めて~幼小連携から総合的な学習のまで. 日本文教出版 86
- 木村吉彦. (2010). 第1章なぜ今「スタートカリキュラム」なのか - スタートカリキュラムと幼保小連携の理論 -. 「スタートカリキュラム」のすべて - 仙台市発信・幼小連携の新しい視点 -. 木村吉彦 (監修). ぎょうせい 6-9
- お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校・子ども発達教育研究センター. (2008). 「接続期」をつくる - 幼・小・中をつなぐ教師と子どもの協働 -. 東洋館出版社
- 杉山ひとみ. (2013). 「幼稚園から小学校への移行における支援のあり方-幼小連携に向けて-」教育実践研究報告書. 169-176
- 山名裕子. (2011). 秋田大学教育文化学部研究紀要 教育科学部門 66 55-61
- 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議. (2010). 「幼児教育と小学校教育の円滑な接続のあり方 (報告)」